



皮膚科学先人の知力・記載力

林部 一人
はやしべ皮膚科院長

皮膚科開業医はよほどサブスペシャリティを前面に押し出していないかぎり、毎日のように多彩な疾患に向かい合う。自分にとって新鮮であれば詳細に記載することになり、後でゴソゴソと記載をもとに専門書に相談する。専門書もなくパソコンもない時代に皮膚科診療をされていた先人の知力・観察力・記載力に驚かされる書物を、片山一郎先生(大阪大学名誉教授)にご紹介いただいた。

『原著に学ぶ皮膚科学の古典』(西岡清監修)という本である。以下、読書感想文的になるがお許しいただきたい。けっこうボリュームがあるので初めはペラペラめくっていたが、菌状息肉症のページで手が止まった。これまでも違和感はあるもののネーミングについては見過ごしていたが、さすがフランス人(Dr.J.L.Alibert)である。アミガサダケというキノコに例えて、カビが原因とのイメージをしたそうである。根気よくハサミで切ったりする経過や、下痢・強い食欲・睾丸腫脹などの記載がある。次項のセザリー症候群ではDr.A.Sézaryの驚くべき詳細な臨床・病理記述が訳されていて、菌状息肉症の類縁疾患との可能性を示唆している。最近流行の漫才師に言葉を借りれば「なんて奴だ！ なんて観察力だ！」である。

それを契機にページを前に戻しながら、自家感作性皮膚炎に目が止まった。Dr.A.Whitfieldは菌に

衣着せぬ先生なのだろうか、訳文が面白い。アレルギー検査について「私は試験の意義を否定する気持ちは全くないが、今まで多数の検査をして、特にこれらの試験結果から有益な情報は得られなかった」と記載しており、片山先生も「今日的視点からの病態の捉え方」とするコメントを書かれている。

色素性蕁麻疹はどのような記載で始まったのだろうか。1869年、Dr.E.Nettleship(のちに眼科医として大成したと書かれている)によると「金髪・色白の女の子、白色に腫れて消退後に褐色のシミ。治療しても変わらない」と書かれている。「いったいなんなんだろう」と考えこむ姿が目につく。ほかにもDr.AM.StevensとDr.FC.Johnsonが1922年に新しい疾患として記載したStevens-Johnson症候群では、「初期に強力な眼疾患の治療をしないと予後不良」だと主張している。すごい洞察力だ。

この本に登場する皮膚科医たちが映画の『ターミネーター』のように私の診療所に現れたら、どんな指導をしてくれるのだろうか。近未来のAI診療と先人の知力・観察力は、いわば車の両輪である。漫然と診察していようものならゴツンと気合いを入れられ「I'll be back」だろうか。